

「僕自身のなかでは少し悔しさが残るフリースケートイングになってしまいました。本当にたくさん点数もいただきましたし、ちよつと出来過ぎかなという気がします。4回転サルコウ(※)を転倒してしまつたあと、きちんと演技をつなげられたのは大きな収穫だと思っています。すぐに全日本選手権がありますが、それに向けてしっかりと頑張つていかなきゃいけないと思います」

(※フィギュアスケートにおけるジャンプの種類の一つで、かつて、スウエーデンのウルリッヒ・サルコウが初めて挑んだことに由来する)

十二月六日に福岡で行なわれたフィギュアスケート「グランプリファイナル」で男子世界歴代二位の高得点で初優勝を飾つた羽生結弦(ゆずる)選手は、自身の演技をそう振り返りました。

羽生選手は、スケートリンクの氷を手で撫でて、必ず競技場に挨拶をしてから演技に入ります。そして、演技終了後ももう一度氷に触れてリンクから離れます。これは、自分の演技がどうであれ「これから演技をさせていただきます。よろしくお願ひします」「今日も精一杯滑らせていただきました。ありがとうございます」と場に対して心を向ける姿勢が現れたものです。

今大会の成果は、羽生選手の確実な演技と華やかな表現力の賜物ですが、一方で、競技に対するこのような真摯な姿勢がもたらした結果ともいえるのではないのでしょうか。



場に心を寄せて 調和を図る

「純粹倫理において、「物境不離の原理」というものがあります。物は形を持ち、形を持つというものは場や空間を占めて、そこにはつきりとした境があるということです。その物と境が調和することによって、それぞれの質が変わってくるという原理をいいます。

羽生選手は、リンクに挨拶をすることによって競技会場や観客と調和し、自身の最大限のパフォーマンスを発揮できるように努めているのでしょう。

剣道や柔道など他の競技においても、試合をする場に一礼してから競技が始まります。私たち倫理法人会のモーニングセミナーでも、会場に一礼してから入室する方は大勢います。その「空間」に心を寄せることで、自身の学びの質が向上したり、その場に調和した心境を作り上げたりすることができるのです。

物境不離の原理の実践としては、場に挨拶をする他に、「清掃」が挙げられます。「清掃は心磨き」といわれますが、埃を払い、磨き、場を清めることで、そこにいる人や物を良き存在にしてくれるのです。

間もなく今年一年も終わろうとしています。職場や家庭の大掃除の段取りを考えている方も多いでしょう。一年の感謝を胸に清掃活動に励み、お世話になった「場」を清めることで、今年一年の邪気を振り払いましよう。清々しい心境で新年を迎えるための準備と働きを心がけてまいりましょう。

絵・今谷 鉄柱